訪問インタビュー

「こんにちわ」玄関を開けると、トントントンとリズミカルな包丁の音が聞こえてきました。これは、私（筆者）が初めて向後さん宅を訪問した時のことです。

向後さんの家族は、ご主人の稔治さん（52歳）妻和子さん（43歳）長男憲一郎くん（13歳）の3人。

ご主人と奥さんは全盲。そんなお二人にとって、横芝町は住みよいところでしょうか。

日常のくらしの中では、私達の何倍も神経をつかっていると思う。そこで、思い切って取材を申し入れたところ、心よく応じてくれました。

自宅でくつろぐ向後さんご夫妻

本当の福祉って何？

誕生から出会いまで

――いつ失明されたのですか

稔治さん　生後間もなく全盲になり、中学までは東京の盲学校に、その後、千葉の県立盲学校に5年間通い、マッサージ師と鍼灸の免許をとりました。

ご両親は琴で身を立てさせようと、5歳から習わせたそうですが、戦争の被害は向後さんにもおよび、生家が焼かれ、方向変換をせざるを得なかったようです。

持ち家になった今、自宅で教えたい、と夢をふくらませていました。

和子さん　私は弱視（0.1）で生まれ、12歳で完全に失明しました。

小学校5年までは普通校に通っていましたが、その後、盲学校に通い、高等部（普通校の高校にあたる）では音楽科を専攻し、琴、三味線を習いました。

完全に失明した当初は、杖をつくのがいやでたまらなかった、と語っていました。

――2人の出会いは

稔治さん　同じ琴の先生に師事した関係で知り合い、一緒になりました。

わが子の誕生から育児

――お子さんの出産に不安はありませんでしたか。

和子さん　しばらく2人の生活が続きましたが、なんとなくものたりなくて……

いろいろ検査した結果、遺伝の心配はない、ということでしたので思い切って生みました。

――一番疑問に思うんですが、育児はどうされましたか。

和子さん　私がとても神経質だったので、結局、4歳まで実家で両親に育ててもらいました。

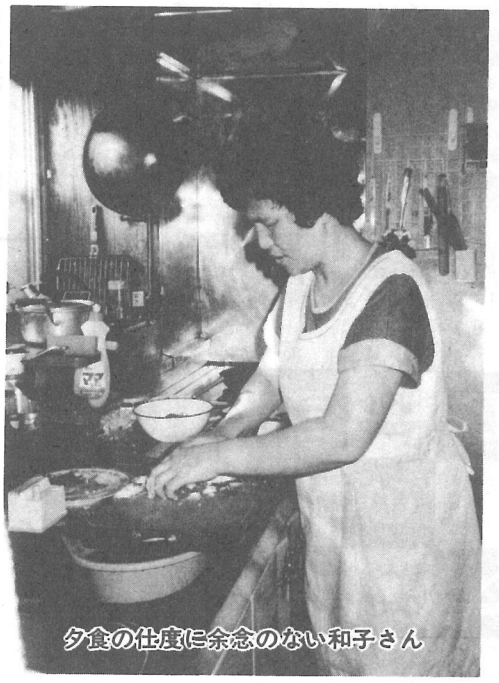
子を引き取ってからも、寂しい思いをさせたくなかったので、4年間同居してもらいました。

日常のくらし

――台所仕事は。まず、調味料の計量は。

和子さん　大ビンから小さめの広口ビンに移して使っています。あまりこぼす心配もないし、計り易いですから。

――揚げ物の温度と使った後の油の処理は。


夕食の仕度に余念のない和子さん